

沖縄県石垣島，与那国島の文化要素に関する一考察 -金刀比羅宮の伝播とその背景を事例として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤,正 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000271

沖縄県石垣島，与那国島の文化要素に関する一考察

——金刀比羅宮の伝播とその背景を事例として——

Study on culture elements Ishugaki-jima and Yonaguni-jima Island in Okinawa

——Case of diffusion and historical background of “Kotohiragu” shrine——

博士前期課程 政治学専攻 2015年度修了

安 藤 正

ANDOH Tadashi

【論文要旨】

本稿は、沖縄県与那国島久部良に1936年建立された金刀比羅宮勧請に尽力した高知県人田村春馬（1871～1944）の出身地である高知県高岡郡鷹ノ巣村（現在の高知県土佐市鷹ノ巣）における金刀比羅信仰を調査し、この信仰が春馬の移住した沖縄県石垣島桃原大野地区、与那国島での活動を通じて、年中行事が継承されるために必要な要素を考察するものである。

青年期を同村で過ごした春馬は、1905年父喜之助、兄弟とともに石垣島に移住し、桃原大野を開墾してサトウキビ、桑の栽培を行った。ある日、弟五郎が海難に遭遇したが、奇跡的に生還したので、喜之助は金刀比羅神の加護と信じ、五郎が漂着した伊野田に金刀比羅宮を勧請し、家族で守っていた。その後春馬は石垣島大川で田村春馬商店を営み、日用品・穀類の販売を行った。

1927年春馬は、与那国島祖納に田村商店を開店し、日用品、穀類の販売、海運業を営んだ。1930年代前半、与那国島近海で海難事故が多発したことから、与那国島久部良で鰹節工場を営む宮崎県人発田貞彦らとともに金刀比羅宮勧請に尽力した。この久部良の金刀比羅宮は現在に至るまで地域の人々の信仰を集めている。

金刀比羅信仰は、四国出身者のアイデンティティと考えられるが、春馬の足跡と環境の変化を観察して年中行事の継承の盛衰に関わると考えられる要素を明らかにする。

【キーワード】 金刀比羅信仰，高知県，石垣島，与那国島，伝播と継承

I はじめに

本稿は、すでに筆者が沖縄県与那国島の金刀比羅宮伝播と承継〔安藤 2016 : P101-118〕及び沖縄県石垣島の金刀比羅宮と地域との関係〔安藤 2017 : P57-72〕について報告しているが、この二か所の金刀比羅宮勧請に関わった高知県人田村春馬の足跡と信仰との関わりに焦点をあてる。

田村春馬は、1871年高知県高岡郡鷹ノ巣村（現在の高知県土佐市鷹ノ巣）に父喜之助母富の次男として生まれた。当時の鷹ノ巣村の主な産業は農業であり、1889年には周辺の村と合併し、戸波村となった。戸波村史によると村内の家俊と市野々に勧請時期不明の琴平神社がある〔高知県高岡郡戸波村 1931 : P439-440, 447-448〕。通常、金刀比羅神は海上安全を祈願する漁の神として海村民、竿師、川船船頭などの信仰を集めていたが、農山村では「農神」として人々の信仰を集め、この信仰によって結ばれた人々が集まって金刀比羅講を催す地区もあった〔高知県 1978 : P57〕。

1905年春馬は、父喜之助、兄森太郎、弟五郎、妹登和とともに沖縄県石垣島伊原間に移住し、兄弟と桃原大野地区を開墾してサトウキビ、桑の栽培を行った〔前花 1976 : P39〕（母富は1892年他界）。当時の石垣島桃原から市街地の四箇¹に通じる道路がなかったため、人貨の移動は小舟を用いていた。

あるとき、小舟で移動中の五郎が海難に遭遇したが、奇跡的に生還したため、喜之助は「金刀比羅神のご加護」と思い、五郎が漂着した石垣島伊野田浜に金刀比羅宮を勧請した。田村家がこの社を管理していたが、森太郎、春馬が四箇で商店を営むため、伊原間を離れており、五郎の没後は桃原大野地区の開墾を行っていた東京府人徳山四郎のもとに嫁いだ妹登和を中心に徳山家で管理を行った。現在は、五郎の孫にあたる田村光枝氏が管理している。

石垣島四箇に移り住んだ春馬は、1927年与那国島祖納に田村商店を開店し、日用品の販売、海運業を営んだ。1930年代前半与那国近海で海難事故が多発したので、春馬は与那国島久部良で鰹節工場を営む宮崎県人発田貞彦、与那国島出身の医師仲嵩嘉尚と祖納で鰹節工場を営む実弟の清らとともに金刀比羅宮勧請に尽力した。そして、1936年に久部良に金刀比羅宮を建立した。

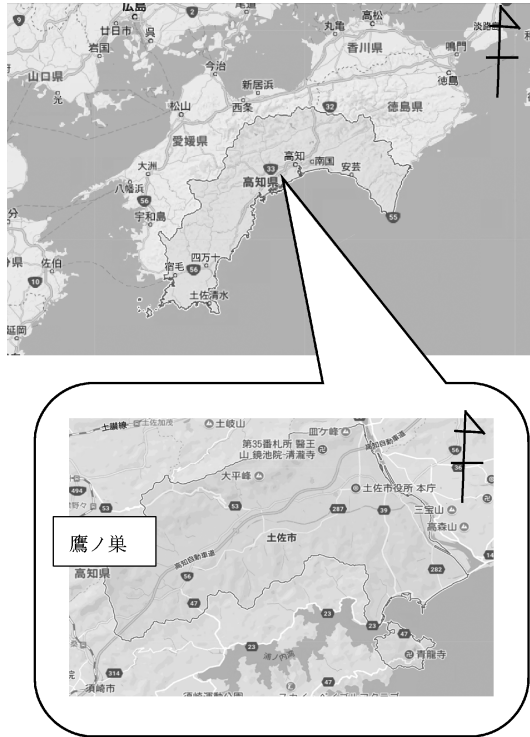
春馬が73歳で没した翌年の1945年第二次世界大戦が終結し、北緯30度線を境に行政分離が図られ、奄美・沖縄は連合国軍により統治されたが、その間も久部良の金刀比羅宮は多くの住民の信仰を集め、管理は船主協会、その後は漁業協同組合が行った。

現在は、与那国町漁業協同組合が管理し、毎年旧暦10月10日には組合員や地域の人々により金刀比羅祭が営まれている。

以上、春馬の足跡と信仰との関わりについて調査し、地域社会への影響を明らかにする。

II 高知県土佐市の概要

高知県土佐市は、東に高知県中部四国山脈から発し土佐湾に注ぐ仁淀川を隔てて高知市と、南は土佐湾、西は虚空蔵山を境に須崎市と、北は不入山脈によっての町、日高村、佐川町と接する地



地図 四国及び高知県土佐市拡大図

域で、人口27,519名（男13,329名，女14,190名），12,435世帯，面積91.49平方キロメートルである（2017年8月1日現在）。

産業は、平野部で温暖な気候，肥沃な土壌を生かした多角的近代農業，南部宇佐地区は沿岸漁業，水産物加工，そして，仁淀川の豊かな水を活用した製紙業などである。平成26年度における土佐市の産業比率は，第一次産業（農林水産業7.3％，第二次産業（鉱工業，建設業等）18.4％，第三次産業（サービス業，不動産業等）74.1％である〔高知県総務部統計課2014〕。

また，市内に鉄道はなく，市中央部を国道56号線，土佐湾沿いを県道23号線が東西方向に走り，これらに接続する県道等が南北方向に設けられている。さらに，市中心部高岡地区に高知自動車道土佐インターチェンジが設けられており，国道56号線と接続している。

公共交通機関は路線バス及びコミュニティバスが市中心部高岡地区から北原，蓮池，戸波，波介，高石，宇佐，新居地区及び鉄道と接続する伊野，高知市内とを結び，地域間の移動を担っている。

（土佐市ホームページに掲載の「市政概要」を要約）

Ⅲ 文献調査

1 1905年頃の高知県高岡郡戸波村の状況

高知県高岡郡戸波村は、現在の高知県土佐市北西部に位置する村で、1958年に当時の高岡町と合併し、翌1959年に土佐市となった。村内は、家俊、鷹ノ巣、市野々、本村、東鴨池、西鴨池、西太郎丸、東太郎丸、浅井、永野、宮ノ内などの部落に分かれ、村役場、小学校、郵便局など公共機関は県道高知宿毛線（後の国道56号線）が通る家俊に置かれた。

田村家が石垣島に赴いたとされる1905年当時の人口は4,487名（男2,256名、女2,231名）、842世帯〔高知県 1907：P52〕、農地、山林の面積は、田284町726反、畑716町6000反、山林457町3213反〔高知県 1907：P25〕である。

『明治38年度高知県統計書』では、産業別の生産量が高岡郡でまとめられているため、1930刊行『戸波村誌』より引用する。

まず、田畑、山林の面積は田298町²8反³、畑608町3反、山林578町3反である。畑で耕作される作物は、主に麦、サツマイモで、その他自家用に使用する豆類、野菜類である。以前は、紙の原料となる楮を栽培していたが、製糸業の衰退する一方で養蚕業は、京都郡は製糸、片倉製糸会社との取引が盛んになったため桑畑に変わった。

また、畜産業は馬、牛、鶏を、果実は桃、ブドウ、柿、琵琶、柑橘類の栽培が行われた。

次に工業は、養蚕業の拡大に伴い、1918年家俊で高陵郡是株式会社、陵東製材台資会社戸波製材所が事業を開始した。その他製紙、酒造、竹細工などの製品が製造されるようになった〔高岡郡戸波村役場 1930：P232-279〕。

村内の神社の琴平神社については、複数建立されているが単独の神社は家俊と市野々に設置されている神社で、その他は境内神社として祀られている。家俊の琴平神社は、「勸請年月日不詳 古来より家俊の崇敬神なり」、祭日は「陰暦 三月十月 各十日」と記されている〔高岡郡戸波村役場 1930：P388-460〕。

また、金刀比羅講は、金刀比羅宮に対する信仰によって結ばれた講として高知県内では「伊勢講」、「石鎚講」とともに県下全域に分布している。土佐の金刀比羅信仰は幕末から明治初期にかけて盛んになった。一般に金刀比羅神は「海上安全」の神として信仰を集めていたが、農山村では農神として信仰されてきた。講には讃岐の金刀比羅宮又は県内の金刀比羅宮に代参する形式のものと特定の日に当屋に集まって神を祀って飲食する形式のものがあつた。講が行われるのは3月10日と10月10日の2回であつた。〔高知県 1978：P57〕。

2 1900年頃の高知県から石垣島までの交通・通信の状況

高知県における海運業は、はじめに藩政時代に海運局が設けられ、1868（明治元）年には十九商會が設立され、土佐の物産が大阪へ輸送された。1871年の廃藩置県により同商會はいったん

解散となったが、その後の1873年、岩崎彌太郎等がこれらの船舶を買収し三菱会社を設立、高知大阪間を週1回結んだ。共同運輸会社が設立された1883年以降、海運業は競争状態となり、1890年には高知大阪間を隔日に就航するようになった。

1885（明治17）年大阪商船株式会社の創業時には、主に瀬戸内海各港を経て九州を結ぶ18航路のなかの第十八本線として大阪、神戸、高知、須崎まで航路が設けられた〔大阪商船株式會社 1934：P38〕。

1894年には高知市から県東部の安田、県西部の下田を結ぶ沿岸航路も設けられた〔高知県史編纂会上巻 1951：P454-458〕。

これらの航路が拡充した背景は、陸上交通特に鉄道網の整備が進まなかったためである。高知県内の鉄道網は1923（大正13）年に須崎日下間が開通、その後香川県高松市に至ったのは1938年である〔高知県史編纂会上巻 1951：P465-466〕。

一方、本土と沖縄を結ぶ航路は、1885年創業した大阪商船株式会社により大阪～鹿児島航路が不定期に沖縄まで延長された。この航路は翌1886年大阪～沖縄線として月1回の航海となった。その後、同航路は1888年に逓信省から神戸～鹿児島～名瀬～沖縄間の航路に対して命令書が交付された。

日清戦争の結果、台湾の割譲により、1897年大阪商船株式会社が台湾総督府から神戸～沖縄～八重山～台湾間月3航海の命令書が交付された。

この時期以降、第二次世界大戦終戦までの間、高知から石垣（八重山）に至る移動手段が確保されたこととなる。

なお、台湾の拓殖事業が進むにつれ人や荷物の往来が活発化し、多くの企業が本土と台湾を結ぶ航路に進出。その後の離合集散を経て大阪商船株式会社にはほぼ集約されるようになった。しかし、大阪商船株式会社による航路独占に伴う貨客運賃の引き上げが新たな課題となった〔沖縄県教育委員会 1976：P546〕。

通信については1872（明治5）年に高岡郵便局（現在の土佐郵便局）が開局、1897（明治30）年には電信業務、1907（明治40）年には電話業務の取り扱いを開始した。戸波郵便局及び宇佐郵便局は1874（明治7）年に開局した〔土佐市史編集委員会 1978：P688〕。

郵便制度が制定されたのが1871（明治3）年なので、現在の土佐市の地域には早い時期に郵便制度が導入されたこととなる。

一方、沖縄県石垣島では1882（明治15）年に八重山島郵便役所が開所し、1897（明治30）年に電信業務の取り扱いを開始した〔石垣市 1994：P957-964〕。

以上のことから、田村家が移住する頃には高知県と石垣島の間で書状や電報の授受は可能であった。

Ⅳ 現地調査及びインタビュー調査

1 高知県土佐市鷹ノ巣地区現地調査

2017年8月8日（火）午前に当該地区の金刀比羅宮のことを調べるため、現地に赴いた。現在の鷹ノ巣地区は、「日ノ地」、「舟川」、「エテの谷」の3つの集落がある。

はじめに仁淀川水系波介川に沿った日ノ地地区に向かう。この地区は、波介川に沿った道路に接した緩い傾斜地に農地があり、その上に人家が設けられている。この波介川のやや上流で市野々川が合流しており、この河川の対岸が市野々地区である。こちらは、河川に沿った道路とほぼ同じ高さに人家が設けられていることから、市野々川合流点より下流では水害が多発したか、農業用水の確保のためかは不明であるが、市野々地区とは異なる土地利用が示されている。

農地では、主に生姜が栽培されており、その他カボチャ、ナスが栽培されていた。

人家の周辺を歩き、住民を探すが見夏の前日に歩いている人はなく、また、金刀比羅宮に係る表示、鳥居などの工作物も見当たらなかった。

次に、国道56号線を越えた舟川地区に向かう。舟川地区は、鷹ノ巣公民館が設けられていることから、この地区の中心地と考えられるが、国道から分岐した県道が舟川に沿って設けられ、舟川の対岸に小規模な水田、生姜、果樹を栽培する農地があり、傾斜地に人家が見える。以前この県道は舟川集落の先の山に阻まれ、行き止まりであったが、2000年に「戸波浦トンネル」が開通し、須崎市浦ノ内地区まで自動車でも10分以内に到達できるようになった。

この地区内で人と出会うことはなく、金刀比羅宮に係る表示等も見当たらなかった。

以上のことから、初めての場所での調査は地図や資料等からの知識だけではなく、地域の事情に精通した情報提供者を確保したうえで臨む必要があることを再認識した。



写真1 高知県土佐市鷹ノ巣日ノ地地区
手前の作物は生姜
正面は須崎市との境をなす虚空蔵山
撮影日 2017年8月8日
撮影者 筆者



写真2 高知県土佐市鷹ノ巣舟川地区
手前は県道47号線
撮影日 2017年8月8日
撮影者 筆者

2 高知県土佐市 植田益實氏 聞き取り調査

日時 2017年8月8日(火) 13:30~15:00

場所 高知県土佐市 土佐市立市民図書館 事務室

植田益實氏は、高知県土佐市の郷土史家で、1978年に発刊された『土佐市史』の編纂に係る専門委員を務められた方である。本年8月上旬の現地調査において、土佐市立市民図書館で史料を探しているときに、同館久保館長及び司書の方に郷土史に造詣の深い方の紹介をお願いした。そして、植田氏に問い合わせて下さり、以下のとおり貴重なお話を伺うことができた。

なお、面談後に書面・電話によりご教授下さったお話しも含めて記載した。

筆者 私が取り組んでいる研究は、沖縄県与那国島に100年位前から島外から伝わり、現在も催されているハーリー、金刀比羅祭といった年中行事を対象にしています。このうち、与那国島に金刀比羅宮を勧請したグループのなかに旧戸波村出身の田村春馬氏がいることがわかりました。田村春馬氏は、1905(明治38)頃石垣島に家族と共に移住しました。その後、石垣島で日用品を扱う商店を営み、1930年頃与那国島に移り、そこで商店と海運業を営んでいました。

このことに関して、①1905年頃、旧戸波村から沖縄県石垣島に移住した人がいたことをご存知でしょうか、そして、②1905年当時の旧戸波村鷹ノ巣の状況を教えてください。

話者 旧戸波村から沖縄県石垣島に移住した人がいたことは聞いたことがありません。

また、1905年当時の旧戸波村鷹ノ巣の状況ですが、産業としては主に農業で、山林を所有している者は炭焼きなども行っていたと思います。

農地は、水田と山畑が半々くらいだと思います。1900年頃から山地の畑で桑を栽培し、養蚕農家が多くなった時期でもありました。最盛期は大正時代です。

鷹ノ巣に隣接する「市野々」は高知から宿毛に通じる旧県道(現在の国道56号線)が通っていたので、道筋に数件の商店があったと思いますが、鷹ノ巣にはなかったと思います。

なお、鷹ノ巣には矢野姓が多いところです。田村姓は聞いた記憶がありません。

ただし、鷹ノ巣地区のことを近くに住まわれている矢野重雄氏に尋ねたところ、田村家の墓所があることを知らせてくれました。埋葬されている人ごとに墓標があり、普通の百姓の墓所とは異なります。農家であるとしたら経済的にも裕福な家であったと思います。

筆者 石垣島伊原間に移住した当初田村家は、近傍の桃原大野地区でサトウキビと桑の栽培をしていたとの記録があります。明治中期高知県でサトウキビ栽培は盛んだったのでしょうか。

話者 製糖は、藩政時代にはじまり、土佐の名産品として『皆山集』にも記載されています。戦前は、仁淀川や波介川の砂地の河川敷でサトウキビ栽培をしていました。高岡地区にも製糖工場がありました。戦後は、栽培されなくなり、近年はマスクメロンやユリの栽培がおこな

われています。

筆者 明治20年代後半、高知県長岡郡岡豊村（現在の高知県南国市の一部）出身と田中悦馬が沖繩県石垣島でサトウキビ栽培を行ったと、『八重山糖業史』に記載されていますが、高岡郡と長岡郡とで人の行き来は活発だったのでしょうか。

話者 長岡郡では早い時期から稲作の二期作を行っていました。一方の高岡郡は一期作でした。二期作の前期の収穫は真夏に行いますが、この作業を手伝うため、高岡郡から鎌とにない棒を持った若者が半月程度出稼ぎをします。この人たちを「秋土」と呼びます。出稼ぎのときに長岡郡で嫁を見つけたり、次男三男の働きを見初められ婿養子になることもあったようです。このことから、人の行き来はあり、双方の情報交換もあったと思います。

筆者 戸波村誌のなかに、講のことが書いてありましたが金刀比羅講は盛んだったのでしょうか。

話者 講としては「伊勢講」も盛んだったと思います。金刀比羅講も家俊に金刀比羅宮があったので設けられていたことが、戸波村誌にも書かれています。金刀比羅神は「海上安全」で知られていますが、「五穀豊穰」も担っているため、海から離れた山間部や農村でも祀られていました。よって、鷹ノ巣のような農村において、金刀比羅信仰の知識はあったと思います。

ただ、講に加入するにも毎回掛け金を負担できるだけの余裕がなければ困難です。「伊勢講」に加入していても「お伊勢様」に参拝できる人は限られていたようです。

このため、「お伊勢参りにいきたいけれど、せめて金刀比羅まいりがしてみたい。」という考えが土佐にはあったと思います。

筆者 戸波村誌や土佐市史に北海道等に移住した人々の記録が記載されていますが、移住のきっかけは何でしょうか。

話者 戸波地区の一部と隣接する波介地域は、波介川の流域で昔は大部分が湿田でした。昭和の初期にブラジル移民が多かったのは、連年の水害に見切りをつけたこの地域の農家でした。

明治36年波介の出間出身で代議士になっていた西原清東は、アメリカに渡りテキサスで大農場を経営し稲作を行いました。清東はクリスチャンでした。

高知県からは60名程度勤勉な青年を渡米させています。募集は主に親戚や知人に頼み有為の者を集めました。

そして、国策として満蒙開拓団が行政主導で募集され、高岡町は分町計画としてこれに応じ、明確な人数は不承知ですが数十人が渡満したと思います。

また、旧蓮池村からは明治30年市村柳吉一家が北光社開拓団に参加し、北海道北見へ入植しています。この人たちもクリスチャンです。市村柳吉の長男竹馬は仙台の神学院神学科を卒業し、福島県の飯坂教会へ牧師として赴任しました。北見市の牧師田村喜代治氏が北見の伝道の歴史を調べているうち、北海道と福島の往復書簡が見つかり、この市村家に関心を持ちその調査記録が『北光社探訪』として出版されています。

北見の市村家は伝道に関与しており、次男直吉の妻正世から福島の兄嫁せきに宛てた手紙

に「誠に可哀そうに、花も何も存じ申さず、高価な物なんぞは一つも存じ申さず候、何も見ることなく、聞く事なし、知恵つきません、それのみ残念にて候。」と書いております。

この内容から開拓農家の嫁にしてはしっかりした家庭に育った、教養のある女性であったと思われる。

移住した人々が移住先で成功したかどうかは記録に残っていませんが、移住した人々は移住先で「一旗揚げよう」と意気込んでいたと思います。しかし、送り出す人々は、「〇〇さんは、食い詰めて△△に行ったんだ。」と、冷ややかに見ていたと思います。

3 高知県土佐市市野々在住 矢野重雄氏からの聞き取り調査

2017年8月7日高知県土佐市の郷土史家植田益實氏から、1900年頃に同市鷹ノ巣から石垣市島に移住した田村家及び金刀比羅宮についてお話を伺ったところ、当地区をよくご存じの矢野重雄氏に連絡を取って頂いた。そして、昨年の鷹ノ巣自治会長及び大正生まれの方に伺ったお話を二通に渡り紙面にして下さり、写真を添えて頂いた。以下はその内容を筆者が項目ごとにまとめたものである。

また、筆者が矢野氏に電話連絡を差し上げたときに伺ったお話を加筆した。

発出年月日 2017年8月17日及び8月23日

過日、土佐市の郷土史家植田氏から同市鷹ノ巣地区の金刀比羅宮の有無や同地区出身の田村家の継承について調べている人（筆者）がいるとの連絡があったので、知り得たことを回答します。

鷹ノ巣地区に今年95歳になられる方から、次の話を伺うことができました。

まず、金刀比羅宮は日の地地区鷹ノ巣101番地宅の上に祀られており、祭礼日には地区を挙げて参拝し大切に守られています。

金刀比羅宮の概要については、最近まで中学校長で昨年の鷹ノ巣自治会長をされた方にお話を伺いました。

金刀比羅宮は、人家から100m位離れた山の中腹にあり、途中やや急な未整備の坂道もありますが、草の茂る夏でも参道も境内も他と比べて整えられており、信仰の深さが察せられます。なお、建立時期は、「不明」とおっしゃっていました。

お社と鳥居は1965年に矢野浅馬氏が奉納されたものです。それ以前も立派なものがあったと思われる。山の中腹に拓かれた境内の広さにそれが偲ばれます。

鳥居の左横に手洗鉢があり、1916（大正6）年3月10日奉納とあり、寄進者は松山春馬氏とあり、お尋ねの与那国島の金刀比羅宮建立に関わった田村春馬氏と姓は異なりますが名が同じというも何かの縁でしょうか。

金刀比羅宮の祭事は、年二回春（旧暦3月10日頃）と秋（旧暦9月10日頃）に大祭を鷹ノ巣自治会が催しています。大祭は、自治会全戸を5～6軒を一つの班として当番を持ち回りで担い、今



写真3 土佐市鷹ノ巣金刀比羅宮

撮影日 2017年8月23日

撮影者 矢野重雄氏

日まで連綿と続いているとのこと。

大祭の際の供え物は、各年の当番が準備しますが決まった品はないと思います。

なお、金刀比羅神が海に関わる神であることから海産物を供えることもあったとは思いますが、以前鷹ノ巣地区は海に至る交通網が未整備であったことから、保存が可能なウツボを用いた料理であったと考えられます。

この地区の「金刀比羅講」は、現在過去ともにその有無は承知していません。

次に、沖縄県石垣島に移住した田村家について詳しいことはご存じではないとのことですが、鷹ノ巣字舟川に同姓の墓所があることを教えてくださいました。

そこで、教えていただいた場所へ赴いたところ、田村春馬氏の父喜之助氏を含む関係者の墓所でした。

墓所は舟川地区の山林の中に上下二段になっており、上段が古く墓石は六基あり、表記は「田邑」となっています。その中央部（南側から三基目）に田村喜之助氏の父岩之助氏、その隣（南側から四基目）に母寅氏の墓石です。その下、下段の二基は南側から田村喜之助氏妻富氏、その隣が喜之助氏の墓石です。

この墓地は、山の中なれども縁者が県内に住んでいるのでしょうか、参拝者があり掃除の跡（刈り払い）や花筒には榊が献じられていました。

現在、土佐市鷹ノ巣には、昭和30年代を最後に田村（邑）姓の方は住んでおられません。旧戸波村内を見ても田村姓は少なく二軒ぐらいでしょうか。私がお話を聞いた方は地区でただ一人の大正生まれの方で、他は皆、昭和それも戦後生まれが大半の中、貴重な生き字引でした。

V 考察

田村春馬が青年期を過ごした高知県高岡郡戸波村には、鷹ノ巣、家俊、市野々に金刀比羅宮が

「農神」として祀られ、春秋大祭が催されていた。そして、地域では金刀比羅講が営まれていたと考えられる。田村家が金刀比羅講の構成員であったのか、または、春馬を含む田村家がどれほどの信仰心を持っていたかを知る術はないが、明治という娯楽の少ない時代において、祭事や周囲での講の活動に対して、ある程度の知識は持っていたであろう。

1905年に沖縄県石垣島伊原間に移住した田村家は桃原大野地区を開墾してサトウキビ、桑の栽培を行っていたため、生業を担う「農神」として金刀比羅神を信仰していたと考えられるが、戸波村と異なるのは社が存在しないことであった。

五郎の海難からの生還に謝して父喜之助が伊野田浜に金刀比羅宮を勧請したことにより、これまでの「農神」に加え「田村家の守り神」の意味も加わったほか、社を建立することで、参拝する対象が具体化することによって信仰が可視化されたと言えよう。このことによって、ともに桃原大野を開墾する本土出身者である徳山家、菊池家などが社に参拝する機会が得られるようになったと考えられる。

その後、春馬が兄森太郎とともに四箇で商売を行うため伊原間を離れ、また、喜之助や五郎が他界したことで、伊野田の金刀比羅宮は妹登和の嫁ぎ先の徳山家で管理することとなった。

第二次世界大戦終了後の数年間は大野地区に本土、先島、台湾出身者が入植し、旧暦3月10日、10月10日の金刀比羅宮祭を地域住民とともに催されたが、1950年代前半入植者の多くが大野地区を去った。その一方で、琉球政府による計画移民が沖縄本島大宜味村から伊野田に入植したが、これらの人々は出身地大宜味村の年中行事を伊野田にもたらした。このような地域住民の変化により金刀比羅宮に関わっていた人々がマイノリティとなり、金刀比羅信仰に関する知識が乏しい移住者がマジョリティとなったことが地域への影響力が低下したものと考えられる。

他方、与那国島久部良の金刀比羅宮については、伊野田とは異なる経過をたどることとなる。

石垣島四箇に移った春馬は1927年与那国島祖納に田村商店を開店し、海運業、日用品販売を行った。その後、1930年代前半に与那国島近海で海難事故が多発したため、発田貞彦と共に金刀比羅宮を勧請し、1936年与那国島久部良ナーマ浜に建立したのである。

春馬は第二次世界大戦中の1944年、与那国で他界するが、その後の1950年頃、発田貞彦は久部良の金刀比羅宮のご神体を持って与那国島を離れてしまう。これは、本土で信仰されている金刀比羅神を神観念が異なる与那国島にもたらしたことで、本土出身者の多くが与那国を離れたのち金刀比羅信仰が廃れていくことを懸念したものと考えられる。

しかし、その後もご神体のない社で祭事が行われ、1978年には当時の仲嵩博漁業協同組合長が香川県金刀比羅宮でご神体を授かった。現在も漁業組組合員や地域の人々の信仰を集めているのは、金刀比羅宮建立の目的が「海上安全」という島で暮らしていく者が抱く共通の願いが込められているからであろう。

以上のことから、継承され続ける行事と時の経過とともに廃れてしまう行事との差異は、その行

事が持つ目的が地域の人々の「共感」が維持されるかどうかにあると考えられる。

また、今までは継承される年中行事を中心に調査・研究を行っていたが本稿を執筆するに際して年中行事を携えて移住する移民に対しても視点を向ける必要性を感じた。

VI むすび

この100年位の間には島外から沖縄県与那国島にもたらされた年中行事を対象に調査・報告を行ってきたが、これらの行事をもたらしただけの人々の移住先での記録や伝承が残っている一方で、出身地での記録が乏しい状況に苦慮する時期もあった。これについては、多くの郷土史家の人たちから、海外移民と比べて沖縄への移住に関する公的記録が戦災等によって滅損したり、いわれなき社会的な差別があったのではないかとのお話を伺うことができた。

年中行事をもたらしただけの移住者は、新たな土地で、より良い生活を手に入れるために移住したことは理解していたが、その背景に存在したかも知れない経済的、社会的な不条理を踏まえ、今後の調査・研究に臨んで行きたい。

VII 謝辞

現地調査において、1900年頃の高知県高岡郡戸波村の状況についてご教授下さった郷土史家の植田益實氏、高知県土佐市鷹ノ巣地区の金刀比羅信仰を地区のキーパーソンに尋ねていただき、金刀比羅宮の写真を提供頂いた矢野重雄氏には多大なご協力を賜った。

また、高知県土佐市立市民図書館の久保館長、司書の方々には、関係資料の検索や所蔵施設の紹介など、ご多忙のところ丁寧にご対応を頂いた。

本稿執筆にあたり、これらの方々のご理解・ご協力を得たことに心からの感謝を申し上げる。

【注】

- 1 石垣島市街地の登野城、石垣、大川及び新川の四つの字の総称。
- 2 土地の面積の単位。約99.18アール。
- 3 土地の面積の単位。約9.92アール

【参考・引用文献】

- 安藤正 2016「年中行事の伝播と受容に係る一考察 — 沖縄県与那国島の金刀比羅祭を事例として —」『政治学研究論集44号 (P101-118)』明治大学大学院政治経済学研究科
- 安藤正 2017「文化要素の受容と継承に関する一考察 — 沖縄県石垣島の金刀比羅宮と地域社会との関わりを事例として —」『政治経済学研究論集第1号』明治大学大学院政治経済学研究科
- 入嵩西正治 1993『八重山糖業史』ニライ社
- 沖縄県教育委員会 1976『沖縄県史 第1巻通史』沖縄県教育委員会
- 大阪商船株式会社 1934『大阪商船株式会社五十年史』大阪商船株式会社
- 高知県 1978『高知県史』高知県
- 高知縣高岡郡役所 1973『高知縣高岡郡史 (復刻版)』株式会社名著出版
- 高知県史編纂会 1951『高知縣史上巻』高知県史編纂会

高岡郡戸波村役場 1930『戸波村誌』高岡郡戸波村役場
土佐市史編集委員会 1978『土佐市史』土佐市
土佐のカツオ漁業史編集委員会 2001『土佐のカツオ漁業史』中土佐町
橋本達弘 2013「土佐市家俊の神々」『土佐史談254号（P163-177）』土佐史談会
平尾道雄他 1973『皆山集』高知県立図書館
前花哲雄 1976『八重山の畜産風土記』沖縄厚生事業協会
前原廣一 1992『伊野田の里に立ちて』前原廣一
吉尾寛 2013「戦前，高知県漁民の台湾南方澳への移住」『土佐史談254号（P22-38）』土佐史談会
米城恵 2015『よみがえるドゥナン』南山舎

【ホームページ】

国立国会図書館デジタルコレクション『高知県統計書 明治38年』<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/807763>
閲覧日2017年 8月20日
高知県総務部統計課『平成26年度市町村経済統計（2017年 5月26日公開）』<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki111901/files/20170519001> 閲覧日2017年 8月19日
土佐市『土佐市プロフィール』<http://www.city.tosa.lg.jp/prof/> 閲覧日2017年 8月19日